



札幌地区
たより

TO

と

MO

も

NI

に

第40号

発行日：2011年7月26日

●発行責任者：札幌地区長 勝谷 太治 ●発行所：カトリック札幌地区／札幌市中央区北1条東6丁目

東日本大震災災害復興支援活動報告会

聖ベネディクトハウス

6月17日（金）15：00～17：00

3月11日の震災発生から100日以上が経ち、この間、札幌教区は祈り、募金、物的人的支援を行ってきました。4月8日には札幌教区のサポートセンターを立ち上げ、4月11日からボランティア派遣が始まり、宮古教会をベースに長期の支援が行われる体制が整っています。報告会では、これまでの活動内容の説明と参加者の体験を分かち合い、今後も支援を継続していくことを確認しました。参加者は60名でした。



○札幌教区の震災支援活動の報告 上杉神父

■募金活動について

「札幌教区災害支援募金口」へ6/17までに集まった総額は約12,600,000円です。

主な支出は、ボランティア活動支援（道具備品、現地で賄う食材、宮古教会での光熱水費・駐車場費用）などに73万円。支援物資提供に約83万円などです。現在のところ資金に余裕はありますが、支援活動が長期になること、支援物資が食料から生活備品へ変わっていくことが予想されるので募金の継続をお願いします。

■ボランティア活動について

4/11の第1陣から6/5の第9陣まで、一般市民、道外者も含め、1週間単位で数えて延べ約70名が札幌教区サポートセンターに登録され参加しました。4月は山田町での瓦礫片付けや泥さらいが多かったのが、5月に入って個人宅の清掃など被災された方と接することのできる作業が増えてきました。作業は肉体労働が多く、看護、保育、傾聴などの資格を生かせる依頼は少ないのが現状です。6月からは「カリタスジャパン」として社協に団体登録して、個人ではなくチームとして補い合って作業しています。当初は、7月頃を一定の目途としていましたが、ニーズが拡がりつつあるので、年内は続ける体制を整えたいと考えています。6/27の週以降のボランティア登録はごく少数になっていますので、皆様のご参加をお待ちしております。

■札幌教区サポートセンターについて

司教館に拠点を置き、センター長は教区事務局長の加藤神父、担当司祭は勝谷神父、上杉神父。事務局としてボランティア経験者5名ほどで後方支援体制を担い、広報、登録者との連絡、フェリー予約、物資調達を行います。宮古ベースは伊達教会の佐久間力さんがリーダーとして常駐しています。

■宮古教会で行われている「分かち合いマーケット」



被災直後の仙台市内

宮古教会と小百合幼稚園との共催で、物資・食料の提供、炊き出しサービスを行いました。これまで2回開催。今回は7月末で、仮設住宅入居後は家電、布団、タオルケットなどニーズが変わってくると思われるので、今後お知らせします。

■ボランティアの一日

6：30ころ起床 7：30までに朝食 8：30社協に登録 10：00～15：00活動

戻って銭湯へ 18：00～19：00夕食 19：00～20：00ミーティング

宿泊 男性は聖堂、女性は和室

山田町での活動の場合は移動時間があるので、上記より40分程度早くなる。



<ボランティア参加者の声>

- ボランティアに行くときは悩むものです。「何のためにいくのか。」「自分の好奇心を満足させるためにいくのか。」でも行って見て被災された方の「津波には襲われなかったけど、被災直後は停電・断水で情報が何も入らずとても不安だった。4日目に秋田ナンバーのレスキュー隊がサイレンを鳴らしながら救出に来たときは本当に嬉しかった。見捨てられていなかった。」という話を聞いて、「やっぱり行かなければならない。」「皆さんのことを思っている」と伝えなければと思いました。
- 私は生まれてこのかた肉体労働をやったこともなければ銭湯に入ったこともなかったのですが、こんな私でもできたのですから誰でもできますし、自分でも信じられない力や人のつながりなど本当にたくさんのものをいただきました。
- 被災地の状況はニュースでしか知りませんでした。実際に行って宮古教会の方と仲良くなりました。久しぶりに電話で話して、「あの頃は落ち込んでいたけど、今はたくさんの方が支えてくださるからもう大丈夫。」と言ってくれました。教会のつながりがあってよかったと思いました。ぜひ一度体験してみるべきだと思います。
- 未信者です。ボランティアのことをネットで調べていたら、札幌教区の募集要項が出ていたので、信用できると思い申し込みました。まがりなりにもできたのは教会の方々のご指導のおかげと感謝しています。帰ってきて、いろいろな人に「何のために行ったんだ。」と聞かれます。自分なりに考えても、なかなか答えができません。神父様の言う「無私精神」には自分はまだ到達しません。ただ、1回のボランティアでいいのかと悩んでいます。また、お世話になるかもしれません。

○秋田から参加した大学生からのメッセージ

宮古市内の道路の側溝の掘り出し作業は文字通り肉体労働で、体力的に厳しい作業でしたが、各自が自分のペースで無理なく取り組むことができ数十メートルがきれいになったのには達成感がありました。ただ、泥がたまった側溝は市内に延々と続いていて、復興まで長い道のりになることも予想されました。

私たちがしたことはとてもわずかですが、小さなことでも被災者の力になることができ、この積み重ねが被災地の復興につながる事が実感できました。チームのメンバーが声をかけ合って作業しているとチームワークが楽しく感じられました。被災した方々のお役に立ちたいとの共通の目的から連帯感が生まれ、一緒に仕事をする事喜びでした。それと、多くの外国人も作業に参加していました。その姿は人が人を思いやることに国境はないことをおしえていました。

支援物資をみんなで運んだ時、運ばれているものは「物」とであると同時に「人の暖かさ」であることを強く感じました。ボランティアに参加して微力でもお役に立てました。そして、人つながりの大切さを知ることができました。また参加したいと思います。

ボランティア体験記

北26条教会 武田五郎

4月8日、札幌教区のサポートセンターが立ち上がり、ボランティア先遣隊が4月11日に岩手県宮古市に派遣されました。メンバーは上杉昌弘神父様の引率で、市内教会の5人と横浜から駆けつけた青年の7人でした。現地は大震災後1ヶ月が経過してはいましたが、宮古市の社会福祉協議会の対応はまだ県外や個人のボランティアを受け入れる体制が整っていませんでした。これは、震災後の1ヶ月は人命救助と安否確認や被災者の避難対策などに追われ、混乱の最中にあることを物語っていました。

さて、現地でボランティア活動の拠点となったカトリック宮古教会は港に近く、駅から徒歩5分という立地ですが、直接的には全く震災被害の痕跡が無かったことは驚きでした。実は、宮古教会には少年イエスを肩に背負って深い川を渡る聖クリストフォロスの大きなレリーフが聖堂正面玄関の壁に掲げられており、災害から守る保護の聖人のご加護が働いていたことを感じ取ることができました。



到着した当日、教会の青年が現地の被災者である友人を伴って教会を訪れて、私たちに直接様々な体験を語っていただき、また最大の被災地となった宮古市周辺と彼の故郷でもある田老町の現地を案内してもらいました。彼の家族は無事であったとのことでしたが、避難所から引越すお手伝いを申し入れたところ「引越し荷物がなにもありません」といわれ言葉がつけませんでした。日本最大の堤防が築かれていた周辺地域は、38メートルを超える大津波に跡形も無く押し流され、全く手の施しようも無いような惨状を目の当たりにしたときは、今回の惨劇の大きさを実感させられました。

山田町に岩手県災害ボランティアセンターが開設されたとの情報を得て、翌日からは車で50分ほどの同センターに通って活動できることになりました。全国各地から40名ほどの人たちがこのセンターを訪れていました。阪神大震災でボランティアを経験している人や、マイカーに機材を積み込んで駆けつけた若い大工職人の方、美容師の女性など様々な人たちが、被災者に心をよせて集まっている光景は共同体そのものでありました。

最初のボランティア活動は、山田町の風光明媚な海辺の高台にあった温泉旅館で、建物の土台だけになった跡地で、流されずに残った無数の食器の選別と、ガラスの破片や濡れた布団やタタミなどの撤去作業でした。1日の作業を終えると、家主であるご夫婦から感謝の言葉をいただき、全く先の見えない状況の中でも、ひとり一人の手作業が復興の一助になるのだという実感がありました。

翌日の作業は地元の青年有志による被災者支援のためのイベントに協力するため、まずはテント設営作業でした。やがて思いがけずに加藤登紀子さんのコンサートが始まり、避難先の山田小学校から次々と被災者の方々が集まってきました。子ども向けのゲームや物資の配給もあり、お昼時には「復興食堂」が開店し、入り口で配られたひとり3個のオハジキで、好きなメニューを選べるというユニークな心配りが印象的でした。

このようにボランティアは、被災者の様々なニーズに応じて活動しますが、基本的にはボランティアセンターの指示に従って行われますので、個人で選択することはできません。ただし女性で保育士、看護師などの資格を持っている場合は、事前に申告してその時々ニーズに応えることはできるようです。私たちの女性グループも避難所に行って、被災者の方と直接お会いして肩モミなどのケアをさせていただくことができました。

さて、札幌サポートセンターは活動「ベース」宮古を拠点に、これから長期に渡る支援体制が整ってきました。この支援活動を支えるのは、ボランティア募集と支援募金活動の2つの柱です。特にボランティア募集の条件は次の通りとなっております。

- ① リスクを伴う活動であることを十分理解し、自己責任で活動できる方
- ② 活動内容や生活環境など厳しい状況に対応でき、体力のある方
- ③ 宿泊場所は宮古教会で雑魚寝、活動期間中の飲食準備は自己責任が基本。食材は支給される。
- ④ 作業用衣服、着替え、防塵メガネ、マスク、作業用靴、ゴム手袋などは持参。
- ⑤ 青森までの交通費は各自負担が原則。青森～宮古間の交通費は実費精算される。

2ヶ月が経過した時点でこれまでに延べ約70人の方が、札幌教区サポートセンターにボランティア登録し活動参加しています。

2回目の参加となった6月には手稲教会の今田玄五神父様もご一緒でした。現地の状況は震災後3ヶ月を経過してなお、ガレキの山と、解体されずに崩壊寸前の建物があちこちに点在したままでした。宮古市にもボランティ

アセンターが開設されていました。そしてベースの宮古教会には、札幌教区から正式に派遣された佐久間力さんがリーダーとして常駐し、ボランティアの受け入れと活動のお世話をしています。専用のワゴン車には「カリタスジャパン」の大きく真っ赤な十字のワッペンが貼られ、私たちも腕章をつけて参加します。他のボランティア参加者から「カリタスジャパンとは？」と関心をもって聞かれることがありましたが、これまでしっかりと継続した活動を通して、認知されつつあると感じました。特に、市内各所の道路排水溝のヘドロ清掃には、自前の高圧洗浄機が大活躍しています。また、宮古教会と隣接の小百合幼稚園との共催で行われた支援物資を提供する「分かち合いマーケット」にもたくさんの方が訪れています。

現地では仮設住宅も各地に建てられはじめ、それに伴うニーズも変化しているようです。そしてボランティアの役割はまだまだまだたくさんあり、人手不足がネックとなっているのが現状のようです。これからは高温と湿度の高い季節を迎えますので、体調管理も大切になってきますが、近くに銭湯があるので作業後の入浴で癒され大変助かっています。

当初ボランティア支援は7月までの予定でしたが、当面しばらく継続されることになりました。

宮古教会のマルコ神父様も「ボランティアの皆さんも帰ったらそれで終わりにしないでください。

被災者の痛みを忘れず、多くの人達に伝え、心を寄せ合い、継続した支援をお願いします」と私たちに話されました。

今回の大震災後、日本の社会が少し変わったように感じます。無縁社会とまでいわれ、お互いの絆が失われてしまった風潮から「日本はひとつ」「世界はひとつ」となって支援の輪が広がっていることを皆が感じているのではないのでしょうか。ボランティア活動は、他人を思いやる心が原点です。そして私たちの信仰の原点もそこにあるのではないのでしょうか。被災地を訪れていちばん感動することは、特に若い人たちがそのような気持ちを抱いてボランティア活動を行っている姿を見ることができるところです。

2011年度札幌地区宣教司牧評議会の開催

2011.5.22 14:00～16:00 北26条教会

札幌地区は信徒の高齢化、司祭の減少、教会維持管理の困難さ等の課題に対応しつつ、宣教共同体として宣教の使命を果たしていくために、昨年度より宣司評の組織機構を評議会・委員会中心からブロック中心へと改革し、地区一体として課題に対応する柔軟な組織体制としました。評議会も年4回開催していたものを、年1回の総合的なものとして予算や活動の大枠を決める場としています。議事では、まず前年度の活動の総括が示されました。改革初年度ということから手探りで歩んできた面もありますが、改革のねらいは着実に根付いてきているという手応えを感じつつも、さらなる一致と協力が必要であるとしています。活動の基本方針は今年度も同様とし、地区一体として取り組むためにブロック・小教区との連携、働き手の育成・発掘が重要になります。また、東日本大震災への支援活動に積極的に協力することとしています。

○2010年度の活動総括（抜粋）

- ・「宣司評」と言わず「札幌地区」を意識して使用したが、信徒間で浸透してきた。
- ・各ブロックでは2～3回開催され、ブロック会議は定着してきている。
- ・企画推進会議と各ブロックとの連動も手探り状態であったが、漸く機能しつつある。
- ・「地区」として新たな奉仕者・働き手の育成・発掘が不十分であった。
- ・ブロックへ委ねた高齢者部会と子どもの信仰部会と企画推進会議の連携が不十分だった。
- ・教区レベルの活動について、小教区を巻き込んだ取り組みに欠けた。

上記の他、次の事項が承認されました。内容は小教区に配布されている議案書を参照してください。

2010年度事業報告

2010年度決算報告

2011年度活動方針（案）

2011年度事業計画

2011年度予算（案）

札幌地区宣教司牧評議会の規約改正



- 女性の集い - あなたはどう思いますか？ パートⅡ

4月25日 北26条教会

・震災の内に私達のありのままの気持ちを語ってみましょう。
・私達の向かう試練について今田神父様の話を聞いて信仰に基づいた受止めを語って見ましょう。と題して、札幌地区の小教区へ呼びかけ、今回は札幌地区20教会のうち12教会67名の方が参加されました。3月11日の東日本大震災は私たち一人ひとりに大きな衝撃を与えました。
今回はボランティアで現地に赴いた3名の方の報告をいただき、その後、今田玄五神父様から被災に会った試練、人生における試練について神父様が歩いてこられた中から、北見教会での二つの出来事についてお話いただきました。神父様のユーモアあふれる語り口に笑い、また、42歳で天国へ旅立たれた太田神父様への思いに涙する場面もありました。昼食からグループに分かれ、交流し各グループで話し合い主な内容を紙に書き出しボードに貼り出しました。勝谷神父様司式の感謝のミサで終了しました。多くの参加者から良い集いであったと感想をいただいております。

参加者の意見・感想抜粋

- *今田神父様のとても分かり易く、新しい出会いに神様に司僕の命を受けた気がしました。
- *とても充実した集まりで、被災地へのお手伝い具体的で出来ることを行い、神父様から「近くにいる方を大切に」を実行して行こうと誓いました。
- *具体的に被災地へのボランティアについて、行けなくてもできることをしようと思う。
- *グループ交流会も少人数で話しやすく、楽しい雰囲気出来ました。
- *初めての参加ですが、他教会の方々と話ができて有意義でした。また、来年も来ます。
- *会場から遠い人のため、午後3時閉会ではいかがでしょうか？
- *ごミサが良かった
- *気を遣わない集いで、このような会でしたらまた参加したい。



女性の集いに参加して

辻野 美智留

爽やかな初夏の日に、75名の女性キリスト者の集いがありました。三人の聖職者の方々のもと私たちは招かれ集まりました。

この日、四つのプログラムのどれも不思議な導きを感じました。

ひとつめは、東日本大震災の地にボランティアにいかれた方のお話でした。そのお一人めが、私の学生時代のお世話になった旧姓大和さんでした。変わらないペコちゃんのようなはにかんだ笑顔に、お目にかかれただけでも感激でした。お話の中で特に印象に残ったことは、行った者にしかわからないリアリティがあるということでした。行くという行為そばにいるという存在の力、その後も実感として想い続けることが出来るのが被災者に寄り添い支える術なのだと感じました。

二つめは、今田神父さまのご講話。テーマは、“神の計らいは限りなく、生涯私はその中に生きる”でした。神父さまの北見時代のショックを振り返る内容で、その出来事の大きさと不思議さにprovidenceの具現を教えてくださいました。神父さまのことは、神のしわざと神のみわざ。将来を見通せない私たちには、今現実の苦しみや困難は、しわざとしか思えない。でも神さまは、時を超えて救いのみわざを行っている。真実救いは叶う。だから苦しい今を耐えて、これからも主につかえようと心を新たにいたしました。なによりも今近くにいる人、そして今日出会う人を日々大切にしようと思いました。

プログラムの三つめは、美味しいお弁当をいただきながら、少人数のグループに分かれての分かち合いでした。取り止めのない雑談から始まったのですが、信仰に裏打ちされた美しい言葉を聴くことができました。

ある方のただ一人の家族であるご主人が、思いがけない事故に会い寝たきりになってしまった。生活が一変し、女一人で様々な苦勞をされた。長い間そして今もその苦しい日々は続いている。とてもお疲れの様子で横になられた。そして話された言葉は、「私は神様から赤ちゃんを頂いた。子どもがね、いなかったの。」どんなに長い間苦しまれたか、でもその向こうには憎しみではなく、神への賛美。美しい方、今日私はこの方に会うために招かれたと思いました。私の息子にも辛いことがありました。長い間苦しんだあと、彼は、十字架から、イエスさまを降ろしました。そしてもう一度、新たな場所でやり直し始めました。

苦しみの向こうにあるのは、決して憎しみではない。これがみわざなのですね。

最後に勝谷神父さまのごミサに預かりました。北26条教会の聖堂は木で出来ていて、倍音が美しく響きます。言葉音の一つ一つを一人一人がしっかり刻み、その全てが響き合っていました。心に残る一日でした。主催して頂いた皆さま、ありがとうございます。

シリーズ 人権フォーラム〈第2回〉

人間として生き・働くために ～東倶知安鉄道「タコ部屋」工事と小説『血の呻き』～

講師 小松 豊さん(札幌郷土を掘る会)

2011年5月28日(土) 15:00～17:00

聖ベネディクトハウス 参加者15名

主催 カトリック札幌地区・社会委員会

小松豊さんは、中学校で社会科・歴史の教師をしていました。1982年札幌郷土を掘る会の立ち上げメンバーの一人で、事務局長、代表もつとめました。現在は同会の語り部2世として活躍しています。



講演要旨

第一次世界大戦で鉄の需要は増し、軍事物資の鉄鉱石を運び出すための鉄道建設は急務であった。中山峠から西側一帯の「脇方鉄山」の鉄鉱石を運ぶため、東倶知安鉄道～倶知安町・東倶知安村(京極町)間13.5キロ、東倶知安村・脇方間7.5キロ～が敷設された。1917(大6)年8月に着工し、'20年7月に開通する。

発注元は鉄道院(国鉄)、元請は橋本組(小樽)、

実際の工事は下請の各組が行った。下請は11組、土工夫は約500人が作業に従事した。下請は、周旋屋の手で騙しと前借により送りこまれた土工夫を使った。

「彼らはきびしい監視のもとにおかれ、なれない労働をしいられた。土工部屋は逃亡に不便な場所がえらばれた。出入口は一か所で、外から鍵がかけられるようになっていた。地元の人たちとの交流がなかったので、社会から隔離された強制労働の別世界になっていた。土工夫はタコであった。(倶知安町百年史)」

川の切り替え工事、山腹壁切り取り・土盛り・護岸石垣工事、トンネル工事など難工事であり、大方がモッコ担ぎ、トロッコ押しの仕事であった。

雪国北海道では、工期内に完成させるには1年かかる工事を約6ヶ月で仕上げなければならない。そのため土工夫は二人分を働かされて酷使された。モッコ担ぎも2倍の180キロ、労働時間も6、7月頃は1日14時間前後になる。衣・食・住も粗末なものであった。

それは、請負制度の末端に位置する「タコ部屋」が極度に低い工事費を強いられ、起低コストを余儀なくされていたからである。10万円かかる工事を三割五分の3万5千円で請け負っていた。

しばしば、怠けているとして虐待を受け、捕まえた逃亡者に対する見せしめリンチは死にいたることもあった。「タコ部屋」労働がいかに苛酷であったかは、当時の新聞、寺の過去帳、見聞証言などからうかがうことができる。



「東倶知安の大椿事・二名は河中に二名は土葬・犯人嫌疑者数名捕縛さる（北海タイムス）」

「監獄部屋といわれた人夫の飯場は、トンネル口の所と駅近くの二か所にありました。働けなくなった病人や逃亡者はリンチを受け、死亡すると線路の近くにうずめるのだというわさもありました。後年トンネル西口近くの畠でプラオの先に人骨がひっかかって出たことが幾回もあり、畑の持ち主は転地しました。（京極町史）」

「こういう逃亡は時々あったようである。尻別川に裸身の人夫の死体が流れていた事もあった。トンネル工事中崩壊事故があって死傷者の出たことは事実である。こういう明瞭な事故は、いちおう葬ったとみえ広徳寺の過去帳に氏名が残っている。（京極町史）」

虚殺・生き埋めなどは警察に対し大方「とびっちょ（逃亡）した」で済んだのである。

大正・昭和初期は「タコ部屋」の全盛期で国の土木事業を請け負っていた。この時代は最も悲惨を極め、マスコミなどからも批判を受けて道議会、国会などでもとりあげられたこともあるが、法規制は未整備で「ザル法」に近く残虐事件はなくならなかった。発覚しても事件にするしないは警察次第でいかようにもできたのである。

倶知安のプロレタリア作家・沼田流人（1898～1964）は、20代になって自立しようと作家を目指す。東倶知安線敷設工事のタコ部屋に潜入・脱出した体験をもとに、小説『血の呻き』を著す。これは、タコ部屋の酷使・虐待・地獄の様子をリアルに描いているため発禁処分を受けた。その後改題・改作した『監獄部屋』は伏字だらけであり読むのは不可能である。以後現在まで完全版は復刻されていない。

きびしい検閲と伏字を受けたのは、タコ部屋を必要とした国家が、その批判や廃止運動につながることを恐れたからである。

このほど、次女の琉璃子さんの尽力で完全版『血の呻き』を入手でき、5年をかけてタコ部屋を描いた部分（全体の1/3）を復刻することができた。

「タコ部屋」のことは戦後になっても今日までタブーである。歴史教科書、副読本、参考書など一切記述されていない。そして今日、全労働者の1/3の「非正規労働者」は重労働、長時間労働、低賃金に加え「物」のように扱われ、少なからずの人が過労死や「使い捨て」の窮状にあっている。

私は次の事をぜひ実現したいと思っている。①歴史教科書に「タコ部屋」記述を ②派遣形態の廃止、雇用形態の選択性（正規雇用を原則に） ③憲法27条 勤労権と営業権の保障の法制化（制度化）。

（報告 社会委員会 松井洋治）

おすすめ図書

札幌民衆史シリーズ10

さっぽろのタコ部屋

札幌民衆史シリーズ11

小説『血の呻き』とタコ部屋

発行 札幌郷土を掘る会

2011年度 札幌地区行事予定表 (白丸=教区行事です)

No	行 事 名	期 日	会 場	実行委・作業部会	目 的	対 象
1	要理担当者養成講座	5/7, 6/4, 7/9, 9/3, 10/8, 11/5, 12/3, 1/7, 2/4, 3/3	北11条	要理WG	要理担当者 (=同伴者) の養成	要理担当者 主任司祭推薦
2	平和講演会	7/30土 14:30~ 17:00	北11条	平和旬間実行委 員会	「平和を祈る旅—被爆マリア像をたずさ えて」 講師 長崎教区長 高見三明大司教	一般 信徒
3	札幌地区カトリック高 校生	8/		協力：青少年委 員会	カトリック高校生会主催の夏のキャンプ	高校生
④	カト高夏キャンプ	8/		協力：青少年委 員会		高校生
⑤	2011WYDマドリッド 大会	8/16月 8/21土	マドリッド	教区青少年委員 会		
6	平和祈願ミサ ・平和行進	8/15月 18:00~ 19:20~	北1条 大通公園	平和旬間実行委 員会	平和祈願ミサ(司式 勝哉太治地区長) 平和行進 プロテスタント教会との交流	一般 信徒
⑦	国際デー	9/25日	北1条	教区主催 うえるかむ・は うず	多国籍の人々との交流(ミサは使徒職大 会で)	一般 外国人 信徒
8	侍者研修会	10/1土 10/2日	藤学園 北 条	侍者研修WG	小学生・中学生・高校生の侍者研修会	小・中・高生
9	札幌地区使徒職大会	10/1土 14:00準備 10/2日 9:00開場	藤学園講堂	当番教会北1条 事務局	テーマ 講師 菊地 功司教 (朗読、説教は日本語・英語の順で)	一般 信徒
10	学習会			社会委員会		
11	市内合同墓参	10/16日	白石墓地	墓参実行委員会	司教館行事 白石墓地(円山,里塚)	一般 信徒
12	典礼研修会 病者への聖体奉仕			典礼WG	病者への家族以外の聖体奉仕者の研修会 スピリチュアル・カウンセリング 担当：上杉昌弘神父 他	主任司祭の推薦 者
13	講演会 テーマ：いのちへのま なざし	11/13(日) 11時ミサ 13時講演	北11条	家庭WG	日本司教団発行の「いのちへのまなざ し」10周年を記念し、今一度その意義と 私たちのありようについて考える 講師 幸田和生東京補佐司教	司祭 修道者 信徒
14	人権フォーラム第3回 「子どもの人権(2)」	12/10土 15~17時	聖ベネディ クト・ハウ ス	社会委員会	講師 カリタス家庭支援センター 堤 邑江さん	一般 信徒
15	聖書講演会 一市民に みことばを 雨宮慧神父	12/23(金) 13:00~ 15:30	共済ホール 無料	聖書WG	一般市民の方々とともにみことばを 雨宮慧神父と草柳隆三氏との対談風に	一般 信徒(誘い合わ せの上)
⑬	高 校 生 エ ク ス ポ ー ジャー			教区主催		高校生
17	学習会 非暴力平和旬間講演会	1/	聖ベネディ クト・ハウ ス	社会委員会・正 義と平和委員会	沖縄	一般 信徒
18	地区交流会 男性の集い			男性の集いWG	地区内の男性の集い 交流会(上杉昌弘神父)	信徒(男性)
⑲	全道カトリック高校生 練成会	3月下旬		協力：青少年委 員会	全道カトリック高校生の練成会	高校生 青年

使徒職大会当番順 2011年：北1条 2012年：北11条 2013年：山鼻 2014年：円山 2015年：北26条 2016年：月寒
2017年：真駒内 2018年：小野幌・大麻 2019年：手稲・花川

編集後記

大震災発生から4カ月以上が過ぎましたが、本格的な復興には未だ長い道のりが残っています。一方、この災禍に多くの人々が我が事のように心を痛め、支援の輪は世界中に広がっています。札幌地区からも多くの方がボランティアに参加しています。札幌地区は共同体として一致して、神様のよき便りを社会の隅々に届けていしましょう。

(K・N)